

# 『キャンタヴィルの幽霊』における 周縁化と中心化

— アメリカの少女を巡って —

池田 祐子

1891年に“Hylo-Idealistic Romance”という副題が付けられたワイルドの中篇小説『キャンタヴィルの幽霊』(1887、以下『キャンタヴィル』と略記)は、主にhy-lologyとidealismの二項対立を中心に論じられてきた。しかし幽霊の300年にも渡る支配を解決に導くのが〈アメリカの少女〉であることを念頭に物語を再構築すると、手を繋ぎ閉ざされた屋敷の奥へと消えていく幽霊と少女との間に、後期ヴィクトリア時代において周縁化(marginalization)された者たちという共通項が浮かび上がってくる。本稿では、イギリスの因襲の表象である幽霊の意義を検証しつつ、文学表象としての〈アメリカの少女〉という観点からヴァージニアを中心に物語を再考してみたい。

## I

『キャンタヴィル』は文字通り幽霊物語の形態を成す。ゴシック調の幽霊物語特有の英雄主義的で作り話的な雰囲気衰退に伴い、1850年代にヴィクトリア朝の特徴を有する幽霊物語が現われた。家庭内の題材を取り扱ったそれらは、当時の社会関係、性的関係の実体を内包した秩序ある小宇宙である(Cox xvii)。つまり幽霊物語はヴィクトリア朝社会を擁立していた最小の構成単位、〈家庭〉を基盤とし始めた。語りの実在性、あるいは蓋然性により恐怖を呼び起こしたヴィクトリア朝幽霊物語も、1880年代になるとその信憑性は危機に瀕する。ワイルドは幽霊の言動を白日の下に晒し戯画化することで、幽霊物語を覆っていた恐怖や蓋然性を取り払った。結果として前景化されたのは物語を支配するヴィクトリア朝のイデオロギーである。「生活や思想のあらゆる領域に事実上訪れた変化に愁い」た世紀末、「遠のいていく過去は不安の焦点となり、文学において幽霊物語は、生

と死の連続体の中で機能することで過去を現在に繋ぎ留める一つの方法を提供した」(Cox ix 拙訳)。己の価値観に偏執狂的に固執する老齢の男性の姿をした幽霊は、時代の流れに逆行する因習主義の体現者として機能している。手枷と足枷をぶら下げた幽霊は、過去を形象化し後世に伝え残そうとする過去から現在への使者である。

幽霊が伝承しようとする過去とは伝統的な家長の威厳である。彼の正体は屋敷内の秘密の小部屋に鎖で繋がれたまま餓死した〈周縁化された〉元家長である。幽霊の存在自体現在という空間の中ではアウトサイダーであり、その不可視性が周縁性を示唆するが、この周縁性は生前の彼の立場をも象徴的に表わしている。彼は妻を、ひどく不器量で、深襜褕を然るべく糊付け出来ず、料理について何も知らなかったという理由で殺害している。妻に押し付けられた価値観は、300年前の貴族階級からヴィクトリア朝の中流中産階級へ受け継がれている。従って幽霊の価値観はヴィクトリア朝の社会通念を映し出す反射鏡でもあり、彼は既に個人の枠を超えて父権の表象に転じていると言えよう。幽霊がもはや〈個〉性を失っていることは〈仮面〉(劇のタイトル・ロール)を付けて登場することに象徴されている。これらの劇のタイトルは『ドリアン・グレイの肖像』のヘンリーの科白を連想させる。“I should think *The Idiot Boy or Dumb but Innocent*. Our fathers used to like that sort of piece, I believe” (Wilde 48).<sup>(1)</sup> 幽霊がヴィクトリア朝初期から中期にかけて上演されたような舞台をパロディ化していることは明白である。幽霊の個人としての尊厳は風前の灯火であり、その滑稽な姿は彼が演じて見せるヴィクトリア朝の大衆文化の残存でしかない。

〈悪妻〉を殺害したサイモン卿は、死して尚自らの“dignity and social position” (Wilde 193)を守ろうとする。彼が失った幽霊としての「尊厳と社会的地位」は同時に、家長としてのサイモン卿が剥奪された尊厳、延いては後期ヴィクトリア朝の脅かされる父権を暗示しているのではないか。世紀末の新たな侵入者、〈アメリカ人〉に怯え、物質主義の極みである新世界の価値観の前に姿を現す事を恐怖する彼は、もはや母親の小間使いが時々針仕事をするのに使用する錦の間でひっそりと憂鬱に沈むことしか出来ない。彼は新たな価値観をもつ世代に居場所を奪われて、マージナルな空間を渡り歩き追い詰められていく。後期ヴィクトリア朝社会で周縁的な存在となって屋敷を彷徨う幽霊は、同じく周縁的な少女と魂を通わせる。ヴァージニアの周縁性の所以を、以下アメリカの少女という文学表象に照らし合わせながら考察する。

## II

幽霊に表象される因襲に対峙するのが、アメリカの若さとピューリタニズムを体現する、ヴァージニアという純潔のラベルを貼られた娘である。『つまらぬ女』(1893)のイリングワース卿が、アメリカの最も古い伝統はその若さであると言った(Wilde 470)ように、ワイルドに限らず、アメリカ国家の若さは文学表象において少女の形を取る傾向にある。アレンは少女が母国の表象となり得た理由を次のように述べる。

The young, unmarried girls had a freedom greater in America than in Europe; they went out by themselves, had “gentlemen friends” and enjoyed themselves generally at their own leisure. . . . Encouraged in brightness and vivacity, what better representatives of young, free and democratic society? (Allen 22)

ヴァージニアも例に違わず、ヘンリー・ジェイムズやイーディス・ウォートンが描く〈異国のアメリカ娘〉の典型である。

Miss Virginia E. Otis was a little girl of fifteen, lithe and lovely as a fawn, and with a fine freedom in her large blue eyes. She was a wonderful amazon, and had once raced old Lord Bilton on her pony twice round the park, winning by a length and a half. . . to the huge delight of the young Duke of Cheshire, who proposed to her on the spot. . . (Wilde 185)

「アマゾン」はヴァージニアの勇ましさに捧げられた称号である。幽霊との対面が遠乗りに出かけたことに起因するように、乗馬はヴァージニアに付き纏う。ウイントルによれば、乗馬は男性性を象徴する行為であり、馬を統御することは力、地位、男性性と結びつけられた。女性の乗馬を描くことは女性の肉体的エネルギーを表明する効果的な方法とされていた。1890年代に“aspiring female ‘amazons’”をターゲットにした乗馬手引き書が登場していることから、徐々に〈女性の乗馬〉に対する認知が中産階級に広がっていった様子が窺える(Wintle 67)。一方で、セアラ・グラント作『ふたご座』の1923年度版に加えられた序文は、女性の乗馬に対する社会の抵抗は依然根強いことを示す。“[A] woman could not drive a pair of horses for profit, however good a whip she was, without the odium of being ‘unsexed’” (Quoted in Wintle 66). こうして文化の記号としての乗馬は、ヴァージニアの社会的位置付けを明らかにしている。

奔放なアメリカ娘に惹かれる因襲社会の男性は、ジェイズらの描く国際物語で繰り返された主題だ。ワイルドは『アメリカの侵略』(1887)の中で次のように述べる。“If a stolid young Englishman is fortunate enough to be introduced to them [American girls] he is amazed at their extraordinary vivacity, their electric quickness of repartee, their inexhaustible store of curious catchwords” (Wilde 965). 新しい女の萌芽とも見なされる奔放さを秘めたヴァージニアだが、ジェイズのヒロインたち程解放されてはいない。彼女たちは総じて、明るさ、自己表示、男性に対する非従属性を特徴とするが、ワイルドのヴァージニアはヴィクトリア朝の価値体系に組み込まれていくことに疑問を感じない。次章では〈中心的〉な男性登場人物、つまり父親や若公爵との関係に表れるヴァージニアの周縁性、受動性を明らかにしていく。

### III

幽霊＝因襲を恐れないが故に幽霊を救済できたヴァージニアだが、それ以外では無口で希薄な存在だ。彼女は幽霊と対面するまで一言も言葉を発する場がない上、若公爵に対する気持ちは結婚後まで描写されていない。これはアメリカ娘は英国に夫探しにやってくるという西洋の一元的見解に依拠している。ワイルドは『アメリカの侵略』の中で“*For our aristocracy they [American women] have an ardent admiration; they adore titles*” (Wilde 964) という見解を露にしている。さらにワイルドは結婚するヴァージニアに贈られた貴族の小冠を“*reward*” (Wilde 203) や“*prize*” (Wilde 966) と表現する。注目すべきは、若公爵との間に彼女自身の言葉が介在する相互関係が成立していないことだ。代わりに成立するのは、オーティス氏と若公爵の相互関係、即ちヴァージニアの譲渡である。ゲイル・ルービン<sup>1)</sup>は、女性を取引するという観点に立ちながら、家父長制社会における異性愛を説明している (Sedgwick 25)。その際女性は“*exchangeable, perhaps symbolic, property for the primary purpose of cementing the bonds of men with men*” (Sedgwick 25-26) として機能する。こうした前提の上に立つならば、ヴァージニアの声が消失し、父親と少年の絆の深め合いが前景化されていることは妥当である。さらに興味深いのは、娘を探すオーティス氏が、何より若公爵が無帽であることを憂慮し、閉まる寸前の店に駆け込んで彼に帽子を買い与える件だ。帽子という〈紳士の印〉<sup>2)</sup>で結ばれた男同士の絆が強調されている。彼らが手を結び国

境を越えて新たなるホモソーシャルな土壌が形成されることで、周縁化されていたアメリカの少女は新しい関係を繋ぐ“*property*”として、イギリス社会での中心化 (centralization) の洗礼を受けることが出来る。

誘拐を疑ったオーティス氏がジプシーの巣窟を探索する場面で、ヴァージニアは社会的〈周縁〉と〈中心〉の境界線上に立っていると考えられる。アーサー・シモンズ曰く“*the Eternal Wanderers . . . [who] are our only link with the East, with Magic, and with Mystery*” (qtd. in Marx 156) であるジプシーは、社会的周縁性の究極の表象でもあるからだ。彼らがヴァージニアを連れ去る行為は、イギリスの社交界に取り込まれようとしているアメリカ少女に働きかける逆向きの力である。しかし、彼女はジプシーと逃亡したのではなく屋敷の中で〈イギリスの因襲〉と対決していた。沈黙の少女が〈新大陸の若さ〉として機能し始めるが、結局は結婚により「*女性の天国*」 (Wilde 470)<sup>3)</sup> から切り離されヴィクトリア朝の社会体系に組み込まれる。迷える家長を眠りにさせたヴァージニアに投げかけられたのは、あの連綿たる名称であった。“*What an angel you are!*” (Wilde 201) この瞬間ヴァージニアはアマゾンから天使へと変貌を遂げ、中心化が完了する。彼女が次に腰を降ろす先がもはや馬上ではなく朽ち果てた“*fallen pillar*” (Wilde 204) の上になっているのは非常に象徴的である。

ヴァージニアが幽霊と闇に消えたことで、不毛のアーモンドの木は花を咲かせるが、ここでアーモンドの木は死と豊饒のダブル・ミーニングをもつ。<sup>4)</sup> 幽霊が表象する〈死〉とヴァージニアが表象する〈豊饒〉が織り成すのは古い軛と新しい軛の交代劇だ。父権制という軛に繋がれた男性の魂を解放する一方で、豊饒という軛に縛られたアメリカの少女の行く末は「*家庭の天使*」と「*多産*」というイメージに支配されている。

こうしたイメージに、さらにワイルドらしい女性像が付加される。秘密を抱えた女性の〈スフィンクス〉化である。若公爵の“*You can have your secrets as long as I have your heart.*” (208) という台詞は逆説的で意味深い。“*magic*”も“*mystery*”もない (Wilde 965) 新大陸の少女は、秘密を抱え続ける限り神秘的に映る。世紀末の文壇を賑わせた〈女と謎とスフィンクス〉のイメージ<sup>5)</sup>の片鱗は、ヴィクトリア朝の〈天使〉なる女性表象と世紀末の〈スフィンクス〉なる女性表象の混在を露にしている。周縁的なアメリカの少女から中心的な女性に変貌を遂げたヒロインの次の仕事は、夫の予言通り出産である。周縁化された幽霊とアメリカの少女を並置し対峙することで見えてきたのは、一つの軛が葬り去られても、次の軛が現われる堂堂巡りのホモソーシャルな社会の姿である。

## 注

- (1) ワイルドからの引用は全て *Complete Works of Oscar Wilde* による。
- (2) ワイルドは『アメリカの印象』の中で、アメリカ人は世界一身なりが良い訳ではないが、無帽の男は僅かしかないと感想を述べている。(Wilde 938)
- (3) 『つまらぬ女』と『ドリアン・グレイの肖像』に登場するこの表現は、アメリカ人作家 W. D. ハウエルズの『アルーストウックの夫人』(1879)にも現れる。“Women owe our continent a double debt of fidelity. It's the paradise of Women, it's their Promised Land where they've been led up out of the Egyptian bondage of Europe. It's the home of freedom” (qtd. in Allen 33).
- (4) 『伝道の書』12, 5の“the almond tree shall flourish”より、死の時間あるいは最後の審判を予告する一方で、生殖器崇拜で陰門に相当することから豊饒も意味する (Vries 12-13)。
- (5) 『イエロー・ブック』に掲載されたフランシス E. ハントリーの『二つの物語：II ルシール』において語り手はルシールを“my Sphinx of every-day life” (56)や “[t]he riddle... of my life” (60)と呼んでいる。

## Works Cited

- Allen, Elizabeth. *A Woman's Place in Novels of Henry James*. London: Macmillan, 1984.
- Cox, Michael, and R. A. Gilber, eds. *Victorian Ghost Stories: An Oxford Anthology*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Huntley, Frances E. “Two Stories: II Lucille.” *Yellow Book* 8 (1896): 44-45.
- Marks, Edward. “Decadent Exoticism and the Woman Poet.” *Women and British Aestheticism*. Eds. Talia Schaffer and Kathy Alexis Psomiades. Virginia: UP of Virginia, 1999. 139-57.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men. English Literature and Male Homosexual Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Vries, Ad de, ed. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland, 1984.
- Wadsworth, Sarah A. “Innocence Abroad: Henry James and the Re-Invention of the American Woman Abroad.” *The Henry James Review* 22 (2001): 107-27.
- Wilde, Oscar. *Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Harper Collins, 1994.
- Wintle, Sarah. “Horses, Bikes and Automobiles: New Woman on the Move.” *The New Woman in Fiction and in Fact*. Ed. Angelique Richardson. New York: Palgrave, 2001.